

沖縄戦の時、與那嶺さんは・・・？

與那嶺盛昭(昭和3年生まれ 大里・古堅)

〈陣地構築 勤労奉仕 鉄血勤皇隊 南部避難 収容所〉

〈前略〉

■開戦の年に一中に入学

私は小学校を卒業後、昭和16年(1941)に首里の沖縄県立第一中学校(現在の沖縄県立首里高等学校の前身。以下、一中^{いちゅう})に入学した。〈中略〉入学の年の12月8日^{しんじゅ}に真珠湾^{わん}攻撃があり、アメリカとの戦争が始まった。〈中略〉

一中の3年生になった頃からは、3～5年生の中から、特攻隊の養成所である^{よかれん}予科練に行く学生もいた。死ぬのが怖いという思いはなく、男に生まれたのだから国のために死ぬこと、「天皇陛下万歳」と言うことは当然だった。〈後略〉

■^{きんろうほうし}勤労奉仕で陣地構築

一中3年生の頃からは授業が週3日ほどに減り、勤労奉仕に動員されるようになった。読谷飛行場の建設では、軍から「学校から何十人学生を出しなさい」という命令があり、2クラスほど一緒に約2週間、泊まり込みで作業した。嘉手納駅までは軽便鉄道で行き、そこからは迎えに来た軍のトラックに乗って、宿泊先の^{ユンタンザ}読谷山国民学校まで行った。作業はモッコに土を入れて運び、大きい広っぱに飛行場を造るというもので大変だった。食事は芋とご飯を混ぜたもの(芋が多くてご飯はまばらにしか入っていなかった)とイチバー汁だった。豚にあげるような食事だったが、戦時中なので仕方がなく、腹が満たされればいいという思いで食べていた。〈後略〉

■昼勤・夜勤で第三十二軍司令部壕を構築

〈前略〉昭和19年の1学期までは授業が行われていたと思うが、2学期からは学校の校舎に兵隊が入っていたためまったく授業ができず、壕掘りの日々だった。一中生は第三十二軍司令部の壕を半年ほどかけて掘ったが非常に大変な作業だった。〈後略〉

〈前略〉

■三叉路での口論と置き去りにされた女の子

弾運びを終え、新里坂^{ビラ}を上って、父たちのいる山原山に戻った。雨が降っていたし、飛行機も来なかったのでそこに3日ほど滞在した。その後山を下りて三叉路で、左に行くか右に行くかで口論になった。父とおじは、知念半島が非戦闘地区になっているという情報をどこからか得ていたようで、左(玉城村^{ひゃくな}百名方面)に向かった方が良いと言った。だが私といここは、知念半島はアメリカ軍が来てすぐに殺されると思っていたので、右(現在の八重瀬町の具志頭^{ぐしちゃん}方面)に行くことを主張した。結局父たちは私たちに負けて、みんなで具志頭方面に向かうことになった。ここが運命の分かれ目だった。

この三叉路で今でも頭に残っているのは、3歳くらいの女の子が置き去りにされて、そばの石をつかんで泣いていたことだ。〈後略〉

『南城市の沖縄戦 証言編-大里-』302頁～314頁掲載

〈考えてみよう〉

○もし、あなたが與那嶺さんなら、女の子をどうしますか？

①一緒に連れていく。

②連れていかない。

③その他()